

強迫的な症状を呈した知的ギフテッド女兒の事例

——自立と依存をめぐる家族の成長——

教育学研究員 北原 祐理
博士課程3年 石川 千春

1. はじめに

豊かな想像力や理解力がある子どもは、環境の影響を強く受け、心理的苦痛や問題行動を表すことがある。本稿では、家族内や幼稚園で起こった本人にとって脅威となる出来事から、強迫様症状を呈し、従来の日常生活への適応が困難となった来談当時5歳女兒の事例を報告する。本事例を通して、筆者らは高知能の子どもが抱える苦痛を目の当たりにした。プレイセラピー担当者にとっては、未就学児の対応は初めてであり、本人の年齢相応の情緒や身体感覚が見られる一方で、独特な内的世界を表現する感性や細かな観察力といった早熟さに驚きや戸惑いを覚えることが多かった。保護者面接担当者にとっては、問題を焦点化することが難しく、本人と環境との相互作用を意識させられた。本稿では、コロナ禍による中断を含むおよそ2年間に渡る面接過程をふり取り、本人と家族の変化に対して担った役割を考察する。

2. 事例の概要

クライアント

蒼さん(仮名)：来談当時5歳女兒(幼稚園年中)。困っていることについて「たくさんあるからねえ」と言う。

家族構成

父親(以下、Fa)：来談当時50代前半、会社員。

母親(以下、Mo)：来談当時30代後半、専業主婦。

主訴

「強迫性障害等の症状があるのではないかと考えている。」(Fa記入の相談申込書より)

受理面接の情報

蒼は腰まである長い髪を三つ編みでまとめ、利発そう

な印象であった。Faは落ち着いた口調でエピソードを交えて話し、Moは大きな相槌や笑いを交えて話す。

両親によると、来談年の9月に、蒼はクラスの男児に「蒼ちゃんのママきもいよね」と耳元で囁かれたことを家で泣きながら話した。その頃より、手を気にし、執拗に同じことを繰り返すようになった。10月には、人にぶつかったのではないかとという加害恐怖、11月には、「ママどっかいけ」、「ぼこぼこに殴りたい」などの「思っではいけない」考えが湧いてきた。その後、蒼は登園を拒否するようになった。何も触らずに手を挙げたままにする、食器の配膳の色や位置が決まっている、布団の四隅を伸ばしてから眠るなどの姿を見て、Faが「異常に感じて」、来談を申し込んだ。受理面接日であった12月現在、Moが厳しい叱り方をやめ、蒼に登園を控えさせることで、一連の症状は多少和らいだという。両親の思いとしては、「幼稚園にどう戻っていくか考えていきたい」とのことであった。また、Faは前年6月から続く自身の闘病生活の影響を補足した。その過程では、抗がん剤治療に伴うFaの免疫力の低下に配慮し、蒼に対して、幼稚園を休ませる、除菌を念入りにさせるということがあった。

蒼はプレイルームで箱庭に興味を示し、「このお花は何でできているんですか」と訊ねた。陪席者が材質を答えると、魚がプラスチックを食べて死んだというニュースを見て、かわいそうだったことを神妙な面持ちで話した。箱庭は「お花の森」だと話し、水の遣り方にも気を配っていた。30分ほど箱庭創りをし、トランポリン、ブランコ、ボール投げなどで無邪気に遊んだ。退室時に陪席者が蒼の持ってきた本を手渡すと「ご本を忘れてしまってますみません。自分が気づくべきでした」と謝った。

受理面接時の見立て

蒼は、元来不安の感受性や考える能力が高く、周囲に気を遣いすぎることが窺えた。父親の闘病生活や、幼稚

園で浴びせられた言葉による傷つきが重なり、手洗いや加害恐怖の症状が現れたと見られる。本人に対しては、プレイセラピーを通して自己表現や不安への対処を学ぶこと、両親に対しては、本人への理解を深めながら対応を調整することを目標に、親子並行面接で継続とした。

3. 面接構造

プレイセラピー

東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室（以下、相談室）の第1プレイルームにて1回50分、およそ隔週の頻度で実施した。プレイルームには、児童期向けの遊具（積木、プラレール、アクアビーズなど）のほか、トランポリンや箱庭が設置されていた。新型コロナウイルス蔓延による閉室期間後は、感染対策のために箱庭は使用不可となり、遊具の種類が制限された第2プレイルームにて、月1回の頻度で再開することとなった。

保護者面接

相談室の第4面接室にてプレイセラピーと同様の頻度で実施した。初期は両親で来談し、次第にMoのみが来談するようになった。約50分の面接に加え、本人の近況や気持ちを共有するために5～10分の合同面接を行った。

心理検査

認知の特徴を理解する目的、及び就学支援に活かす目的で、第6回と第29回に児童向けウェクスラー式知能検査（Wechsler Intelligence Scale for Children – Fourth Edition：以下、WISC-IV）を実施した。また、発達の特徴を把握するために、第8回に親面接式自閉スペクトラム症評定尺度テキスト改訂版（Parent-interview ASD Rating Scale-Text Revision：以下、PARS-TR）を実施した。

コンサルテーション

第20回と第21回の間に出張コンサルテーションを実施した。主な目的は、小学校入学後の環境調整の検討、登校が難しくなった場合の合理的配慮の確認であった。

4. 面接の経過

全31回の面接の経過を5つの時期に分けて述べる。①は保護者面接では親セラピスト（以下、MTh）、プレイセラピーでは子セラピスト（以下、CTh）の発言を示す。

第Ⅰ期（＃1～＃7） アセスメントと両親の関わり調整

■保護者面接 初回（＃1）の冒頭の合同面接で、蒼は困りごとを「手がベタベタして洗いたくなっちゃう」、「友だちに嫌なこと言っちゃうんじゃないかって思っちゃって心配になる」と話す。両親は、蒼が公園では友だちと遊ぶことから、困り感を飲み込めない様子であった。Faは、トミカを擬人化する遊びが好きで家族に配役に与える蒼を要求が多いと見ていた（＃2「Fa：自分が描いた脚本に沿ってほしいというか」）。Moはインターネット上のHighly Sensitive Childのチェックリストのほとんどに蒼が当てはまり、「繊細とか敏感とかいうお話が出てきたけど、分かりにくいというか」（＃3）と戸惑いを見せた。

2月に入ると、Mo同伴の登園が叶い、家庭では1週間に2～3日の登園が目標となっていた。蒼は友だちにまつわる嫌な出来事を話そうになった。Faは、「Fa：嫌だったら嫌って言うてみようか」、「蒼：うーんでも言えないな」、「Fa：嫌なことされたら無視しよっか」、「蒼：怖かったから無視はできない」、「Fa：嫌なこと言うしょうがない人もいるから、逃げちゃうのがいいよ」と、問題解決志向の聴き方をしていた。MThが〈対処法を考える前のクッションとして気持ちを返す、例えば、「言い方がすごく怖く感じたんだね」と、挟んでみるのもいいですね。自分の繊細さを理解してくれているという安心感にも繋がると思う〉と勧めると、両親は「それは難しいね」と顔を合わせた（＃4）。背景には、蒼の思考の固さがあるようだった（＃5「Fa：嫌だったんだねとは言いますが、100回言っても彼女は変わらないと思いますよ」）。

続く回では、蒼の症状は、言葉にならない不安をコントロールしようとするに由来するという基本的な見立てを共有しつつ、嫌な感情を含めて受け入れられる体験の重要性を重ねて伝えた。加えて、ネガティブな記憶に囚われる蒼の認知の特徴を把握する目的で、WISC-IVを導入した（＃6）。WISC-IVのフィードバック（FIQ：143、言語理解：143、知覚推理：136、ワーキングメモリ：141、処理速度：107）では、物事の本質を捉え、解決の見通しを立てる力が高いこと、見通しが立つわりに行動に移すことが得意ではなく、細部にこだわりやすいこと（≒処理速度の相対的な低さ）を伝え、言葉や視覚的なイメージを用いて、視野を広げる関わりを推奨した（＃7）。

■プレイセラピー 左手だけ水色のグローブをはめていたが、プレイルームではすぐに外し、意欲的に遊ぶ。冬場はずっとマスクを付けていた。敬語で話すことが多い。相談室については「また楽しい遊びをしようって」と来談意欲が語られる。箱庭で「病院はないかしらね」

と言って、赤十字マークの建物を池の上に起き、屋根の上で2人の看護師を向かい合わせに置く。「水の上に病院があるのは変ですよ」と言って病院を撤去し、最終的にシンデレラを置く（#1）。野球やバドミントン、トランポリンなど体を動かす遊びも楽しみ、大きな積木で「エルサのお城を作る」（#2）、アクアビーズで自らデザインを考えて雪の結晶を作る（#3「素敵な思い出作りでしたね」）など、自分の思い描くイメージを形にする創造力の豊かな遊びが毎行われる。また、オセロではCThが少しコツを伝えと、逆転勝利する（#4）。幼稚園が「ざわざわしているのがすごい気になる」、枝で作った城を男の子に壊され、「謝りもしなかったので悲しかった」ことが語られる（#3）。自ら嫌な出来事をためらいながらも語るようになる（#4）。「男の子たちが、私たちにパンチの真似しようとしたの。夜中に思い出しちゃって。」〈蒼ちゃん、怒った？〉「もう言い切りました。でもその子はわからなくて。私のことずっと無視してましたね。すごいイラついたの。今朝、起きたらお漏らししちゃった。」

第II期（#8～#15） 蒼の登園拒否と家族の葛藤

■保護者面接 年長となった蒼の幼稚園での居づらさを見兼ね、就学相談の利用を考えているという。蒼の能力の高さに鑑みて、MThから（いわゆる「特別支援級」とも違うと思う）と説明したが、利用の意志は固いようだった。就学相談の参考資料として、PARS-TRを実施したところ、現在得点6点、幼児期ピーク得点8点（いずれもカットオフ値以下）で、感覚入力に対する過敏性に関わる項目に該当した（#8～#9）。

6月に入ると、蒼は目の下にクマを作り、Moの表情にも疲労感が見え隠れした。Moが「友だちも嫌な面だけじゃない色々な側面を見るようにしたら？」と返したら、蒼が痼癪を爆発させたという。「行きたくない」と「行けそう」を繰り返す蒼に、両親で「どっちが本当の気持ちなのかな？」と聞いたことも語られる。〈きつとどっちも本当の気持ち。しんどいから行きたくない、でも、小学校やみんなのことを思うと行かないとな。〉Moは付き添いの疲労も重なり、蒼とFaの双方に対して怒りをぶつけてしまったと涙ぐんだ（#10）。

#11はMThの勧めから両親で来談し、話し合いの末「無理させないことにした」という。〈IQ140以上はギフトの領域。同年代と合わなくても無理はない。想像や推測が働きすぎる不安を和らげながら、周囲と知的レベルの合う環境探しをできれば。〉この後、家庭内で勉強関連の指摘をせずに見守るという方針を試みたところ、

蒼は読書に没頭するようになった（#12～#13）。

#14は再び夫婦で来談し、冒頭は重い空気に包まれた。Moは冒頭で突然落涙した。Faは、蒼とMoの間で宿題をめぐる衝突が激化したことを話す。両親は、宿題に取り組めないのであれば、幼稚園も幼児塾もやめるべきだと考えていたが、それに対して蒼は、「幼稚園はやめたくない。やめたら自分がすごくちっぽけな人間に思える。申し訳ないと思っている。でも、そう言われると愛されていないんだって思っちゃう」と言い、Moはひどくショックを受けた。Faは、蒼について「その時々で立場を変えて、判断をするとか、責任を持つということをしたがらない」と話す。MThより、幼児塾は友だち作りのためなど、目的を柔軟にもつことを提案したが、Faは「塾は契約ですし、それ（宿題などの義務を果たさずに通うこと）を許容することはルールを破っている、極端に言うとな人を殺してもいいということと同じではないですか」と語気を強めた。Moはそれを聞きながら沈黙するも、「でもそれって6歳に言うことなのかな？」と涙した。〈Moはそう伝えていいと思いますよ。「まだ6歳だもんね、迷うよね」と。ご両親とも蒼ちゃんが「自分はちっぽけ」と思うことは望んでいないはずですよ。次回も一緒にご来談いただけないでしょうか。〉

#15では、夫婦が互いの姿勢への理解を深められるように、MThがA3用紙にジェノグラムを描き、それを全員で見ながらMoとFaの家族歴を聴取することとした。Moは小学生の頃より「ほとんど家にいない子」で、父親の知人の誘いで芸能の世界を知った。10代後半に働き始め、20歳のときに母親を癌で亡くし、体の弱い兄弟の面倒を見ていた。「チャラチャラしていた」が、出産後に「きちんとする」ようになった。Moは「普通じゃない人生だったので（笑）。子どもに対してはどんなふうにすれば普通かな」と語った。一方、Faは、大学時代より上京し、仕事に注力してきた。父親は病死し、母親の臨終には立ち会えなかった。幼少期については「普通の家庭でした。家族で過ごすようなことは、あまり覚えていませんね」と語った。MThより、Moは「普通」の子育てを模索してきたことを伝え返し、語りの少ないFaに対しては傾聴し、蒼の遊びに出てくる病気の表象やFaに対する労りの気持ちを共有した。〈蒼ちゃんはFaのことを大好きだと思いますよ。〉「Fa：僕から向かっていっても、わーっと喜ぶわけではないんですよ。病気は治ることはない。そういうものとしてやっていくしかないんです。」

■プレイセラピー 敬語を使う頻度が減る。箱庭では橋の向こうに病院を置く。校舎を置いて、「これ東大かな」と言って笑う。赤ちゃんをベビーカーに乗せ、「お母さん

が大事に持って行って大きくなって東大に行って、帰りにベビーカーで味噌ラーメンを食べて帰ってきた」と、自分の体験とシンクロするように語る。幼稚園について「本当は行きたくない」(#8)。自分の創作物を他の子が勝手に使って嫌だった出来事が語られる。〈言わずに我慢?〉「うん。悲しすぎると言えなくなるタイプだから」(#9)。「幼稚園は休むことに決めた」(#10)。積木でエルサのお城を作る。造花をいくつか束ね、「みんな死んじゃったけど、束ねたから、みんなでお話できる」といって、城に花を飾る。「葉を開発する人になりたい。ガンとかの葉」(#11)。#12ではおもちゃの車3台を使った空想遊びが展開される。黄色の車をA君、赤をB君、金色をC君と名づけ、声のトーンが上がり、物語が語られる。C君がひっくり返り、「白血病!」と叫ぶ。C君の救出が始まる。「僕たちがベッドになってC君を運ぶ。」紙にピンクの葉を描く。「僕、お葉を開発するお医者さんになりたい!」〈いっぱいストーリーができたね。〉「C君は呼吸が止まった。また次回助けよう」と、しばらく同様の空想物語が続く(～#16)。男の子と積木で遊んだとき、「寿司の炙りを作って。焦げたらただの焼きになっちゃうからひっくり返したら、『やめて』って言われた」と語る。このような嫌な出来事を“うんこ”に象徴させトイレの水で流すというイメージワーク(「うんこのワーク」)をCThがクレヨン画を用いながら説明したところ、蒼は素直に聞いていたが、次の遊びをやりたいが(#13)。空想物語ではガソリンスタンドで点滴が行われ、CThにセリフを言うよう要求することもある。箱庭でも同じ3台の車を登場させ(Figure 1)、砂をかけて「汚れから守る。」

〈どんな汚れから守る?〉「バイキン。」Faについては「いつも疲れて元気がなさそう」(#14)。

第Ⅲ期(#16～#19) 蒼の自我の出現と決断

■保護者面接 9月に入り、Faは病状と多忙により来談を控え、Moが就学相談の手続きを進めるようになった。Moによると、Faは「幼稚園は行きたくないなら行かなくていいんだよ」という態度に変わり、「7割ふざけた感じ、3割論ず感じ」で接している。蒼もまた、Faに対して無邪気にふざけることが増えた。一方、Moの姿が見えなくなると、「いや! マミ(Mo)と一緒にがいい!」と叫ぶなど、母子分離困難は顕著になっていた(#16)。

Moは家庭外での繋がり求め、ギフトド向けの会や国際的な高IQ者コミュニティであるMENSA(メンサ)の会合にも足を伸ばしていた。蒼は交流を通して、人体への関心を興味深く聴いてもらっていた。相談室にお気に入りの図鑑を持参し、臓器についての知識を披露するようになった。Moは、「最近是一緒に勉強することで寄り添っている」と語りながらも、「最初から自分のことを特別って思ってたほしくない」と、教育熱心な保護者たちに圧倒される一面も見せた(#17～18)。

11月の面接回(#19)では、突如幼稚園を退園したことが報告される。母子分離困難が続く、Faが「もうやめちゃうか」と言ったら、蒼は「うん、やめる」と言い、一気に退園に至った。〈Faはそれについて?〉「Mo: 頑張ったんだからもういいよねって。もしも小学校行けなくても、自分らしくいられるのがいいよ、そうできるようにFaも努力するよ、という感じ。」家族で作成した



Figure 1. #14の箱庭。車や家具に砂がかけられる。

退学届には、「ようちえんにいくところにはびびがはいからもういきたくないです」と書かれていた。(退園は) 勇気がいることでしたね。) Moは「でも、ここまで書かせる、感じているということ。受け取ってもらわなきゃいけないと思って」と声を振り絞った。

■プレイセラピー 語りの中に蒼自身の自己分析が含まれるようになる。(心配なこと?)「幼稚園のことだと、いっぱい嫌なことされて、夏休みの前だけだ。(頭に残ってて、もっと増えたら、ヒビになっちゃうかもしれないなって) (#16)。#17から空想遊びは行われぬ。トランポリンで飛びながら、床に立つCThとバランスボールの投げっこをする。野球をやりながら、好きなチームが「最近勝っている」と嬉しそうに話す。(幼稚園をお休みして、心が落ち着いてきた?)「うん。でも運動会とか見ると、ちょっと心が傷ついちゃう」(#17)。箱庭では「おうちつこう」とリビングや庭(花や色とりどりの木)を作り、家具を並べる。家具に本が挟まっていることに気づき、「私が今度おうちにあるピンセットを洗って持てきますから、それで取りましょう」と解決策を話す。「気持ちを落ち着かせたい気分がほしいから。(家でも) 一人でいたくて、しゃべらないこともある」(#18)。蒼がトランポリンに乗りカラーボールを投げ合う遊びで、床に落下するハプニングが起こる。最初は「大丈夫」と言うが、ぐらついていた乳歯から血が出ていることがわかり、泣き出す。Moのいる部屋に行ってティッシュで止血し、血が止まると泣き止む。再びプレイルームに戻って残りの時間は楽しそうに積木を作る (#19)。

第Ⅳ期 (#20～#25) 小学校入学に向けた環境調整

■保護者面接 11月末 (#20)、就学相談は「配慮必要なし」の判定となり、国立大学附属小学校や都立小学校への入学を検討するも、抽選に恵まれなかった。学区の公立小学校に入学する見通しとなり、Faからの伝言という形で、就学相談への協力の依頼がなされた。Faの要望は、心理師から客観情報を交えたエビデンス・ベーストの話を添えることで、学校側が可能な配慮を明確にすることであった。蒼は退園後、情緒的に落ち着いていた。Moは蒼に「つらいんだよね」と声かけができるようになり、蒼もMoの体調が整わないときは一人で過ごすなど、家の中で母子分離ができるようになった。

12月初旬、区立小学校内にて出張コンサルテーションを実施した。Faが主導し、セラピストらはWISC-IVの所見や、相談室では蒼が他者と関わっているという事実から、「安心できる条件の揃った環境」が必要であることを強調した。入学前にクラスメイトの配慮などを検討

するための校長面談を受ける形にまとまった (#21)。

両親は、蒼の勉強面は心配していないが、社会との隔たりができることを懸念し、友だちとの交流や自転車での散歩などを促していた (#22～24)。蒼は学校に行くなら耳栓をしたい、図工ならいいなど、自ら入学に関わる発言をする一方で、公園で友だちに会うと除菌シートを多く欲しがるようになり、不安の増幅が見られた。没頭しているお絵描きでは、『ドラえもん』のしずかちゃんがいじめられる漫画を描く。蒼曰く「蒼はしずかちゃん」、「ジャイアンは初めから登場しない。生理的に無理だから」という。(現実への直面と精神的な負担が比例して、精神的につらくなると、空想の世界で自分を守ることはありえます。「これは蒼ちゃん?」とか「〇〇はしんどいね」とか、声かけをしてあげられるといいですね。)

3月半ば (#25)、世間は新型コロナウイルスの上陸によりひどく混乱していた。入学前の校長面談は延期となった。4月以降、相談室の長期閉室が決まり、相談室の再開状況に応じて面接を再開することで合意した。

■プレイセラピー 再び空想物語が展開されるが、救出劇の表現に変化が見られる。車のC君が倒れるが、これまでより早く救出され薬が効き、「C君はすっかり遊べるようになりました」。次にA君も倒れるが、実は寝ていただけというオチをつけて笑う (#20)。箱庭で宝探し。車のA君たちが色石などの“宝”を探す。A君が砂の中に埋まる。「宝探しじゃなくてA君探しになっちゃった!」1台ずつ砂の中に埋もれ、他の2台が見つけることが繰り返される (#21)。電子ピアノで蒼が高音部、CThが低音部の鍵盤を弾く。曲は「ドラえもん」(#22)。(最近面白いこと?)「あった。お母さんがいつも笑ってくれる。一緒に遊んだ」(#23)。#24から箱庭での空想遊びが展開する。ドラえもんの人形を見つけてテンションが上がり、「僕ドラえもんです」と声真似をする。ベビーカーにドラえもんを寝かせ、「お布団をやりたい」と砂をかける (#24, Figure 2)。茶髪のしずかちゃんを最初は「違う」と言うが、藤子不二雄と刻まれた文字を読み、「しずかちゃんだ!」と喜ぶ。のび太は見つからない。(どれが蒼ちゃん?)「二セしずかちゃん。」箱庭でドラえもんが砂に埋もれ、しずかちゃんはドラミちゃんと一緒に助ける。「のび太がいたらいいんだけど。」砂嵐がきて、しずかちゃんが砂に埋もれる。「犯人はスネ夫でした。蒼が作った話では、スネ夫がしずかちゃんをずっといじめてる (笑)」「スネ夫、怖いね。」「でもドラえもんやドラミちゃんにはやらない」「スネ夫さんが上にいる!」「逃げる!」3人でしずかちゃんの家に移動する (#25)。



Figure 2. #24の箱庭。最後にドラえものの隣にドラミちゃんを寝かせた。

第Ⅴ期（#26～#31） 親子が見つけた社会との接点

■保護者面接 #26は半年ぶりの来談となった。小学1年生は1学級25名ほどで、性格や言葉の優しい友だちと同じクラスになるなど配慮が行き届いている。それでも分散登校開始時には除菌や手洗いが頻繁になったため、児童精神科を受診し、不安や神経過敏を鎮める漢方薬で対応することになった。主治医は、高IQ児の苦しさを理解しており、Moには「他者との違いに敏感になっている。お母さんから離れられないのは理解者がいない不安から来るのでは」という話、蒼には「苦手を避け、得意を伸ばす」という話があった。Moは、蒼の読書への過集中や、食事・歯磨き・入浴ができず、促すと癇癪を起こすことに苦慮していた。MThの任期（翌3月満了）を説明し、継続的な相談先を検討することで合意した。

11月（#27）には、体育の長縄で過呼吸になったことから、通級利用を考え、WISC-IVの再実施が依頼された。激しい癇癪も続き、「ついに16時間くらい（7時～23時）」。宿題のプリントをノートに貼る作業で、Moが「糊をつける場所」について指摘すると、爆発したという。主治医がエビリファイ導入を試みたが、動悸が起こり中断した。

蒼の癇癪は続き、Moが褒めることを心がけても、「それ療育対応だよ」と返されることを苦しそうに語る。〈蒼ちゃんが学校に行き始め、生活を整えないといけない部分もあり。焦りのようなものもあるのかなと。〉「Mo：6年間かけて通う社会との繋がりを完全には断ちたくないというのがある。それでも蒼は離れていかなかったので。適応しようとする感覚がなくなるのは怖いという

のもあった。担任の先生も、クラスのみんなも、本当にいい人で。3月になるとクラスも変わっちゃうし。そこかな、そこが焦りかな（落涙）。」〈その涙はどんな気持ち？〉「Mo：ありがたいな、という。人に恵まれているなと思う涙です。」〈周りはこんなに協力してくれるのに、思うようにいかないところからも来ていたかもしれない。なんで普通にいかないんだろう、と。〉「Mo：そうですね。普通の子を見ていると眩しいです。学校行って、普通に荷物を置いて、授業の支度をして、ってできるのが。なんでそれが難しいんだろう、でも、蒼は色々敏感だから他の子とは違うんだ、と。〉〈他のお子さんが眩しく見えるときは黄色信号かもしれない。おおらかに見えなくなるとき。お母さんご自身の行き詰まる感じももっとお話していただいていい。〉（#28）

冬休み明けの1月（#29）、親子の表情は明るかった。Moは清掃アルバイトを始め、蒼は少しずつ朝から一緒に外出し、お手伝いの小遣いをもらうことが習慣になった。また、糖質制限を試みて、蒼の情緒が落ち着いた気がするとのことだった。MThがそれらの工夫に感銘を受けると、Moは主治医にも褒められたと嬉しそうにした。

さらに、冬休み明けより毎日登校が続いていた。大量のプリントをすぐに終える蒼を見て「すごい」と明るく言う花形の男子がいるという。Moは、蒼に対して「こうやって言う（指摘する）ときは、蒼の一部でね、全部がダメって言っているんじゃないよ」と、漫画を描きながら話していると言い、蒼の思考過程や、髪の毛の長さや洋服の色へのこだわりについても、「そういうものなんですよね、きっと」と受け止めるようになった。〈蒼ちゃ

んがお母さんから離れようと頑張っているのが伝わる。ゆっくりと自立を見守っていけたら。」「Mo:Faともゆっくり、と。副校長先生にも『ゆっくりでいいですから』と言われていて助かっています。』

2月の合同面接で、蒼に〈学校は行ったら、悪くない感じ?〉と尋ねると、「悪くはない」という。蒼は、頭の中の「チェスト」には「引き出しがいっぱい」あり、嫌な記憶が溜まることを説明する（#30「蒼：今もそうだよ。楽しいことはすぐにぶーンって出ちゃうけど、嫌なことは残る」）。しかし、頭の中の「モヤモヤ」をスマートフォンアプリに書き出す（#30「蒼：私は3人で遊ぶことが苦手で、そう誘われるとお断りします。それを言われるたびに、私は優しくお断りします。ですが、私が何回お断りしても、友だちは、遊ぼうよって言います。どうして聞いてもらえないんだろうと、私はもやもやします」）など、感情の発散方法を手に入れていた。Moは、頭の中に「楽しいもののボックス」や「よかったボックス」も作ってみよう、と穏やかに語りかけていた。

3月の終結回（#31）では、プレイセラピーやペアレントトレーニンググループに対応している他大学附属相談室を紹介した。MThから、Moが多くの資源を探し、親子で繋がる努力をしてきたことを改めて伝えると、Moは「ここに來られて。ああ頼っていいんだなって思えるようになりました」と顔を綻ばせた。

■プレイセラピー ダーツではCThと得点を加算して争い、蒼が6点差で勝つ。度々声をあげて笑う。「よく発作が起きる。ママがいなかったら。」〈不安だね。〉「だからお父さんと留守番ができない。」〈発作はどんな?〉「呼吸が走ったときと同じくらい速くなる」,「怒られた翌日には大体なる」(#26)。呼吸法と筋弛緩法を実践。蒼は体をだらりとさせて床に寝転ぶ。「過呼吸になったとき、鼻から息を吸って吐いてってやるけど、最初しかできない」(#27)。WISC-IVの検査では開始直後に不安な様子を見せ、Moのいる部屋に行き抱きしめてもらう場面があった（#28）。Moとのアルバイトでは、「モニターを見て、本を読んでいる。」〈お客さんの様子を見る?〉「うん。殴られている人とかがいるんだ。」〈それはびっくりしたね。〉（#29）。ダーツ、野球の後、おはじきで遊ぶ。おはじきは学校でもよくやると語られる。「おはじきが落ちたとき、私が探す役。細かいところに目がいくから。」〈蒼ちゃんの得意なところを生かしているね。〉学校には毎日行っていること、仲のよい友だちとの計画が「楽しみ」と語られる。パニック様の状態は起こらなくなり、Moと喧嘩しても「仲直りを夜のうちにしたからだと思う」と話す（#30）。終結回ではキャッ

チボールなどを様々に工夫して遊び、大きな笑い声が何度も響いた。〈長い間よく通ってくれたね。〉「毎回ここにくるのが楽しかった。」合同面接で蒼に渡す卒業証書で、CThが蒼のこれまでの頑張りや変化、ありのままで大丈夫なことなどを伝え、真剣な顔で聞いていた（#31）。

5. 考察

見立てと事例の経過：ギフテッドであること

本事例では、強迫様症状の訴えから来談した蒼の症状を多面的に理解することに努めた。本節ではまず蒼がどのような子どもだったかを振り返りたい。

来談当初、両親は、蒼の症状発現のきっかけを園児同志の諍いだと捉えていたが、些細な出来事に過敏に反応する蒼を理解し難い様子もあった。蒼は、受面接時から環境汚染による魚の死を悼んだり、プレイセラピーではガソリンスタンドを点滴に見立てたり、自分の背丈よりも大きな城を組み立てたりするなど、発想力と知的な豊かさを窺わせた。WISC-IVの結果から見えたのは、蒼が知的ギフテッド（intellectual gifted）であるほどに高い知的能力を備えていたことであった。

全米小児ギフテッド協会によると、知的ギフテッドとは「1つあるいは複数の分野でずば抜けた資質（論理的思考力や学習能力）、あるいは、力量（上位10%以上の成績）を示す人々」を指す（Webb et al., 2016）。アメリカの州法では、より狭義に上位3～5%とされることも多いが、蒼の知能指数（1回目WISC-IVのFIQ: 140, 2回目WISC-IVのFIQ: 136）は、これを十分に満たすものであった。未就学児にして人体図鑑や養育書に興味をもち、生殖や免疫系のしくみを説明するなど、セラピストらを驚かせる場面もあった。「言葉の微妙なニュアンスを非常によく理解する」、「社会問題や道徳的問題への関心の高さ（理想主義、繊細さ）」といったギフテッドの特徴（Webb et al., 2016）は、どれも蒼の表出とよく重なる。

さらに、蒼は知的な豊かさからくる過興奮性（overexcitability）が顕著だった。高知能の子どもは、生得的に刺激を通常より遥かに強い強度で体験し、強烈な反応を示すことがある（Webb et al., 2016）。蒼にとって登園とは、雑多な音、周囲で飛び交う言葉や表情などに晒され、かつ本人の苦痛は理解されにくく、あるときは傷つき、あるときは必要以上に心身を消耗する出来事であった。登園に伴う情動的な激しさは、家族葛藤をも招いた。自立や責任の理念に重きを置くFa、それに応え

ようとするも情動的な反応が先立つ蒼、そしてFaの理念に対して「6歳に言うことなのかな?」(#14) と思い吐露したMoの姿は、家族がそれぞれを慮ろうとしながらもそれらが上手く噛み合わない状況を象徴していた。

保護者面接では、一貫して蒼の知的な豊かさを前向きなものとして説明し、同時に、蒼には他者と理解し合えないもどかしさがあるろうこと、推測が働きすぎるがために周囲の人々の想像を超えるほどの不安を体験しているであろうことを伝えた。強迫様症状や癇癪の土台に蒼の知的発達の高さがあることを共有できたことは、その後の対応にある程度方向づけたと考えられる。

やがて蒼が退園を望むと、両親が本人の意思を後援する形で退園届けが提出された。これは大きな転換点であり、蒼は興味の探索と発散に振り切ることとなった。小学校入学前には、通常学級への適応が課題として浮き上がり、蒼が接しやすい友人の特徴や避けたい刺激を具体的に説明することで、環境調整を行った。その後コロナ禍による中断があったものの、その間も親子は、自分たちの生きにくさと社会との繋がり方を懸命に探り続け、小学1年生の冬に登校が続くという形で実を結んだ。

強迫様症状の変遷と意味

本事例では、強迫様症状そのものを問題として捉えず、蒼の性質と蒼を取り巻くシステムの相互作用を反映した表出として理解してきた。そもそも小児における強迫は、正常の心理発達過程における強迫から、いわゆる強迫症（強迫性障害）に至るまで幅広い（岡田，2011）。ギフテッドの誤診について見解をまとめているWebb et al. (2016) によると、強迫症の本質は思考に起因し、知的要素が大きく関わる。また、発達段階と個人差を考慮に入れた相互関係に基づくアプローチ（Developmental, Individual-difference, Relationship-based approach）においても、強迫症に関与する発達の要素として、感覚刺激への過度な反応性、視空間能力の高さ、頑固さが挙げられている（Greenspan, 2009）。強迫は、全体像をよく把握できる人にとって、来るべき事態を予測し、それによるパニックを避けるために環境をコントロールする試みの一部となり得るためである（Greenspan, 2009）。

以上のギフテッドネスと強迫症の親和性に鑑みると、蒼の初期（第Ⅰ期）の強迫様症状には、知的能力の高さゆえに父親の抗がん剤治療の状況を理解し、コントロール感を得ることで安心感を求めるという機能があったと推測される。過剰な除菌や接触の回避は、病気を持ち込む不安を打ち消すため、食器の配膳の決まりや布団の四隅を伸ばすなどの儀式的行為は、気持ちを落ち着かせる

ためのものだったと考えられる。呪術的思考は、子どもにとっては正常な発達の一部であることも多く（Webb et al., 2016）、蒼の一連の行動は、現実に行き始めていることに伴う不安に対処するために必要なものだったと考えられる。「自分がきちんと管理すれば、Faを傷つけないでいられる（Faが助かるかもしれない）」という潜在的な観念は十分理解できる。また、早熟なギフテッドは、現実理解能力の高さと経験や情緒の未熟さの非同期発達による不調和を伴い、これが強迫様症状を招く場合もある（Webb et al., 2016）。蒼の場合も、周囲の事態を年齢相応以上に理解しながら、その強烈な不安を言葉にしたり、共有したりする術を持たなかった。

こうした理解から、蒼に必要なことは、身体感覚や言語を通じて体験を共有し、情緒的になだめられ、情動発達を支えられることだと考えた。ところが、両親にとって感情を受け止めるという対応は、容易ではなかった。そのため、幼稚園から距離をとることに賛同し、蒼のストレスとなる刺激の軽減と、家庭で守られることによる安心感を促進した。次第に強迫様症状は和らいだが、学校関連の言葉を聞く、友だちから遊びを無理強いされるなどの登校関連刺激が増えると（第Ⅳ期）、症状は再燃した。しかし、このときMoは症状に注目するのではなく、蒼の体験する不安に目を向けるようになり（#23「Mo：彼女にとっての一番は安心とか信頼なのかなと思った。除菌シートを後で欲しがる友だちとそうではない子がいる」）、蒼の症状も以前のように過激なものではなかった。

蒼の強迫様症状は、父親の病気への不安の緩和と現実適応に際するストレス対処の役割をもち、折々に必要なケアを引き出す機能をもっていたと考えられる。そのため、本事例では、曝露反応妨害法のような行動的介入に舵を切らず、症状の意味するところは何かという理解を共有することを意識した。Greenspan (2009) は、強迫症に陥りやすい人は、ケアを求める際も要求的であると述べている。蒼にも強いコントロール欲求は垣間見えたが、何よりもまず、蒼ほどの現実理解能力と繊細な感覚があれば、不安や嫌悪感が生じて自然であることを親子に伝え、「一人でなんとかする対処」から「一緒に考える対処」へと転換させていくことを図った。そして、親子が安心の得方を確認していく中で、徐々に他者との接触を再開し、結果的にそれが曝露法に近い形で働いたと考えられる。

自立と依存をめぐる家族の成長

上述のギフテッドとしての理解、強迫様症状の意味の

理解が並行し、システムの力に助けられて進行してきたのが本事例である。蒼が傷つく体験は明確に減ったわけではなかったが、MENSA会員、ギフテッドの子どもをもつ親、理解のある担任教員やクラスメイト、精神科医との出会いを通して、親子の傷つきは癒やされた。

セラピストらは、蒼の一家から一人ひとりが独立して自分のことを担う家族風土を感じていた。初期には、Faの理知的で厳格な対処にMThが動揺する場面もあった。しかし、面接内で描いたジェノグラム(#15)からは、FaとMo各々が自立して生きてきた原家族歴が見えてきた。両親ともに実の親や兄弟との間に大きな喪失体験をもちながら、Faは「普通の家庭」で育ってきたと語り、Moは「普通ではなかった」と語ったことも印象的であった。

本事例において、家族の歴史を明確に扱うことはなかった。それは、MThの技量が乏しかったことに加え、両親での継続来談が難しかったためである。しかし、MThは、両親にとって、情緒を交流する風土は馴染みのないものなのではないかと感じていた。さらに、蒼が生まれた数年後にFaの命に関わる病気が発覚したことは、家族にとって喪失を想起させる大きな脅威で、現実的で実務的な対処が優先されることが不可欠だったのではないかと推察する。

蒼は6歳という幼さにして、この家族風土と現実的な困難の中でしっかり生きようとしていた。どうしてもないことに対して、自分なりに昇華をする形が、持ち前の想像力を活かした空想遊びだったのだろう。救急救命や薬の開発が度々モチーフとして出てくる遊びは、家族の痛烈な不安と父親の健康への渴望を思い起こさせるものだった。初めは、空想遊びは蒼が独立して物事を対処するための媒体となっていた。しかし、CThと空想を分かち合い、言葉にしてみる、という体験が進んだ。現実生活では、同年齢集団での遊びの中で細やかな表現を理解されず、否定されてきた蒼にとって、好きなように表現できる空間は内面世界を支えるものだったと考えられる。#24の箱庭で、蒼は砂の「お布団」をかけられたドラえものの隣に、最後にドラミちゃんを置いた。蒼にとって砂はバイキン(悪いもの)から守る象徴であり、ドラミちゃんを寄り添わせることによって、「誰かを守り誰かに守られる」という感覚を味わっていたように見受けられる。ときに空想から離れて身体遊びをすること、感覚的に楽しむこと、それにCThが支持的についていくことも、蒼の主体性の成長を支えたのではないだろうか。

そして、両親もまた蒼の世界を理解しようと努め続けた。それでもなお、蒼の世界を認めすぎると、社会から

隔絶するのではないかという不安が幾度となく表出された。病気を抱えるFaの心情を想像するに、娘の長い将来を案じるのは当然のことだろう。セラピストらは、両親を支える資源が必要だと感じていたが、時期を同じくしてコンサルテーションの依頼があり、引き受ける形で環境調整が進んだ。「普通」を求めていたMoが、自身の感情を認めながら、蒼を見守るようになったことは紛れもない変化である。依存先を増やせた結果、母子はほどよい距離をとれるようになり、やがてアルバイトや栄養学に基づくおやつ調整など、Moの機転の賜物である工夫が取り入れられた。蒼が生活を楽しむ様子も見られ、それからまもなく蒼は自ら学級に足を運ぶようになった。

終結回に「頼っていいんだなって」(#31)と語ったMoは、痛みを抱えながらも自立と依存を行き来しようとする頼もしいお母さんであった。同年齢の子どもに蒼が理解されるにはまだ時間が必要なのかもしれない。しかし、多種多様な資源を通して、親子のあり方が受け入れられ、両親もまた自分たちのあり方を受け入れてきた過程が、蒼が自らの言葉や想像の力を理解し、嫌な事柄に折り合いをつけていくことを助けたと考えられる。

6. 課題

保護者面接を繰り返って

本事例をふり返ると、特定の介入方針を定められたわけではなく、セラピストらの力の及ばないところで歯車がうまく回り始めたことがわかる。強いて言うならば、蒼の能力の希少さを伝えたいというMThの姿勢は一貫していた。そして、「ギフテッド」の概念を軸にマクロなケースの定式化を行い、平穏な生活を求めた家族や、蒼の性質とやむを得ず合わない学校などのシステムに働きかけた。

エコシステムに注目した統合的アプローチでは、潜在能力や資源を引き出すことが重視され、そのためには、セラピスト自らの価値観の自覚や、中立性の維持が求められる(平木, 2010)。保護者面接において、MThはMoの苦痛により反応を示していたように思う。それはMThが女性であるとともに、面接回を重ねる中でMoの率直さが増したように感じ、感情の表出や理解の治療的意義を支持したいと感じていたからだと考えられる。この構造がFaにもたらした体験を考慮すべきだった。また、より大きなシステムとして、発達に個性のある子どもに対する学校の価値観などにも配慮し、関係者間の調整を図る必要が生じる場合もあるだろう。

ミクロなケースの定式化についても課題が残る。保護

者面談では、蒼が訴える反芻や過呼吸に対する具体的な対処までを提示できなかった。紙幅の都合上割愛したが、退園後の第Ⅲ期には、活動記録表や認知の偏りを見つけるワークシートを導入し、気分と行動の関連の発見を促した。これにより、親子が前向きな気分になる活動を認識できた面はあったが、MThが積極的に継続を促さず、対症療法的な対応となった。蒼の特性と苦痛な反応の関連性を整理し、健康的な自立を助けるスキルを学ぶための共同作業を提案できるとなよかったと考える。

プレイセラピーをふり返って

蒼は初期から主体的に遊ぶことを通して自己表現を行っていた。CThとしては遊びに呼応して感覚的に楽しむことを支持し、相互作用の中で蒼がゆっくり気持ち言葉をすること、その語りを受容することを心がけ、蒼の内的世界への理解が深められるよう観察することも意識した。しかし、ネガティブな体験の記憶の残りやすさ、Faの体調やMoとの分離不安など、日常の様々な不安や傷つき体験に対して、十分な手当を行う難しさを感じた。プレイセラピーでは「相手のメッセージを適切に読みとる能力を向上させていくことが不可欠」(田中, 2011)とされる。しかし、CThは未就学児を担当するのは初めてで技能も未熟であり、蒼の空想遊びの迫力に圧倒されることが多く、繊細で豊かなメッセージを読みとりきれない面が多々あったと思われる。サポートという点では、より能動的かつ現実生活の対処につながるような支援ができてよかったといえる。#13でイメージを用いた「うんこのワーク」という方法を試みたが、うまく活かせなかった。蒼の理解に沿った伝え方や、プレイセラピーで行った心理教育的関わりを実生活に反映できるように、MThとの連携についても検討すべきであった。

7. おわりに

本事例は、言葉だけでなく、多彩な表象や背景を通して、他者の体験を想像し、理解しようとするという心理臨床の要となる姿勢を教えてくれた。蒼はその後、他大学附属相談室での相談期間を経て、登校しながらスクールカウンセリングに通うようになったとのことだった。社会に適応しながらも自分の世界の守り方を見つける蒼の成長を、セラピストらは心の中で応援し続けている。

最後に、本事例について研究室内で検討の機会を設けてくださった下山晴彦先生、本論文へのコメントの執筆をあたたくお引き受けくださいました平木典子先生、本論文の執筆をご快諾くださいました蒼さんとお父様お

母様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Greenspan, S. (2009). *Overcoming Anxiety, Depression and Other Mental Health Disorders in Children and Adults: A New Roadmap for Families and Professionals*. Interdisciplinary Council on Developmental and Learning Disorders.
(グリーンズパン, S. 広瀬 宏之 (監訳) (2014). こころの病への発達論的アプローチ DIRモデルに基づいた理解と関わり 創元社)
- 平木典子 (2010). 臨床心理学をまなぶ4 統合的介入法 東京大学出版
- 岡田俊 (2011). 小児期精神疾患と強迫スペクトラム 精神神経学雑誌, 113, 992-998.
- 田中千穂子 (2011). プレイセラピーへの手びき一関係の綾をどう読みとるか— 日本評論社
- Webb, J. T., Amend, E. R., Beijan, P., Webb, N. E., Kazujanakis, M., Olenchak, F. R., & Goerss, J. (2016). *Misdiagnosis and Dual Diagnoses of Gifted Children and Adults: ADHD, Bipolar, OCD, Asperger's, Depression, and Other Disorders (2nd ed.)*. Great Potential Press.
- (ウェブ, J. T., アmend, E. R., ベルジャン, P., ウェブ, N. E., クズジャナキス, M., オレンチャック, F. R., ゴース, J. 角谷詩織・榊原洋一 (監訳) (2019). ギフティッド その誤診と重複診断—心理・医療・教育の現場から— (第2版) 北大路書房)

(指導教員 野中舞子講師)